

話題提供

「風のハーモニー」の過去・現在・未来

佐藤清太郎（秋田森の会・風のハーモニー代表幹事）

人が「森に育てられる」社会

私のやっている「秋田森の会・風のハーモニー」の活動についてお話しし、後の討議の時に叱りを頂いたり、また激励をして頂けたら有難いと思います。

私は、1944年、戦中の生まれです。ですから、私自身小さい時から祖父に連れられて山歩きをし、森と人間が一体となった生活を約20年間くらい続けています。その後、地域の共有林の担当者になったりもし、自分の所有する持ち山もありました。入会が良いとか悪いとかではなく、入会の持つ意義は、住民に平等でその地域に住んでいる方の生活と一体にある、人々は「森に育てられている」という感情を強く持っています。

しかし、現代の社会の中では人間が「森を作る」という反対の考え方に移ってきて、林業が盛んになっている。私が20代頃までは「森に育てられる」生活でした。森に植林をして、帰りには薪を背負って家に帰りました。「ぶなぐり」という3センチくらい小さい枝の束を背負って帰ったものです。それを冬期間の燃料にする。それを取るために集落の人たちが入会に仕事に行き、帰りにそれを担いできて、どのくらいあれば今年の冬を越せるか話していました。カヤぶき屋根が多かったので、カヤは大切な資源でした。秋になるとカヤ刈り山の口が開くいう、カヤを刈っても良いという日を定め、その日は朝からいっせいにいってカヤを刈って屋根の葺き替えに使ったり、冬囲いのために使う。生活と山は切り離せない、共存共生という中に私はあったような気がします。誰の森に行っても何を採ってきても森のものは良いんだという、すべてが共有の中にあるんだという連帯感もありました。祖父と森に行くと、他人の山であろうと共有林であろうと森に入ると森に育てられていると感じました。その中で、森における秩序みたいなエチケットをきちんと教えられ、絶対山火事は出すなとか、森に行ったら小さな虫や蛇とかいろんな動物がいても人間に襲いかかるものには対抗しても良いが、それ以外は殺すなとか、色んなことを教わりながら生きてきました。

しかし、戦後人工林 スギを植えた事によって、今までそこに入っていた人が入れなくなった。それは、人工林は個人の資産として考えるようになり、人間が「森を作る」という考え方に立った。しかし、「森に育てられる」、森の力を信じていくという形で森を見たとき、人間とは一体何だろう、どんな虫だろう、どんな動物だろう、森と共生できる生き物なのかなどずっと考えてきました。そして足りなかったのは森林に対する教育、考え方を次世代に伝えないでずっときてしまった。その間30年間位の空白があります。学校でも林業という科目は無くなってきたし、小学校では森に行くとクマがでるから危ないとかで野外活動は専門家がいなければ入れない。私達の小さい時は

自由に行って、森が遊び場であって、またいろいろな食べ物を頂ける場であった。そんな思い出がありました。そのような事が秋田森の会に繋がりました。私が小さい頃遊んだ事を今の子供達がはたしてやれるだろうか、もしやるとしたならば私も一緒にやってみたいと思った事が秋田森の会の始まりです。私は今、すべてについて、森から人間を見るという形に変えました。「秋田森の会・風のハーモニー」は森林と健康というテーマを掲げています。人間の健康とは何かと考えたとき、森にも健康があるだろうと、人間だけが良くても森の健康が悪い中に人間が入って、森林浴をやって本当に人間が健康になれるかという単純な考え方から始まりました。

テーマは森林と健康

この会を立ち上げる以前から、ずっと自分の山に子供達や一般の人達をたくさん入れながら、森林リクリエーションという形で遊んできました。林業以外の人たちが多く来ていました。そのような中で、各自が勝手に入って勝手に帰るのではなく、ひとつの会を作って森を利用したらどうかと考えるようになりました。

一方で、森林と福祉に何か共通するものがあるだろうとも考えていました。ある時、地元出身の著名なお医者さんで、杉並区高井戸にある高齢者福祉施設も含めた浴風会病院の院長先生と東京の地下鉄で偶然に出会い、地元ではなかなか会えない先生だったのでこちらから声をかけ、意気投合して20分くらい話しました。そこで、山や川を大事にせよと、これから高齢化社会になると絶対必要で、それが人間を救えるという話、必ず人間は自然に帰るとのお話を頂きました。今から40年くらい前です。その時はまだ高齢化や少子化などまだ頭にありませんでしたが、森林リハビリなど森林と福祉が自分の中で結びついたように思います。そして、地元のお医者さんとかマスコミの方々、学校の先生方等、林業以外の方々がそれを非常に望んでいることが分かりました。特にマスコミの方々など非常に忙しい方が自分の癒しの場を自然に求める。自然の力を頼りにしているとわかり、それをヒントにして今から20年前に「秋田森の会・風のハーモニー」を14人で立ち上げました。医者、保険屋、生け花の先生等、異業種の人が集まって会を作りました。

簡単な会則ですが、森と人との共生を目的し、テーマは森林と健康。人間に健康があるように森にも健康がある。健康がなかったら、森に入っても人間は健康にはなれない。さてその健康とは何か。医者は、血圧は高い人は低くすれば良いし、低い人は高くすれば良い、全部直さなくても常にバランスを取ればそれが健康に繋がると言います。森を見る目と森から人間を見たときに、人間はあまりにも森のバランスを崩し、また自分達のバランスも崩す、そんな事があっては困るという事で、私達の会はすべてに優しく人生を豊かに生きるという簡単な会則で取り組みました。今になれば当たり前の事ですが、20年前ではこのような会に誰が入ってくれるのだろう、一人でも会員がいれば良いと思っていましたが、いろんな方々が入ってきてくれました。

会員は個人会員で会費を頂いています。入会書には生年月日と血液型まで書くという、何か事故があったらお互いに連帯でそれに取り組もうと、カルテみたいな会員証でした。その当時は個人情報あまり言われなかったので、そのような形にしました。会の組織は14人で、私が代表幹事で森のオーナーでした。正会員を30ヘクタールの森で300人限定で、行政にはできるだけ頼らず、

自分たちでやるものには自分達で金を出し、自己責任でやりましょうという形でした。補助金はもらいましたが、県や市町村にはあまり手を上げないで、逆に金ではなくバックアップをして下さいとお願いして今まで続けてきました。

フィールドは、「健康の森」と名付け、私の持ち山の120haの中の30haを使って頂いています。私が一番に楽しんでいると言ったほうが良いですが、秋田市中心部から南に15km、海岸から東に4kmで秋田市から近く、利便性の良い、飛行場から来ても近い里山です。健康の森の入口は田んぼです。田んぼには四季折々風景があり、少し高い所が森になっていて、広葉樹と針葉樹が混ざっています。健康の森の看板は、20年前の看板をそのまま使用しています。なぜなら、いろいろな先生方の話を聞いたら、光るものを森に置いて動物達に危険性を感じさせてはいけません。それが逆に人間に跳ね返ってくる。だからできるだけそこにあるものを使い、最低限の看板で良いという話なのでそのままの看板を使っています。中心に、けもの道を改良した作業道があります。子供を入れるためではなく私が森を管理するために作った道路でしたが、結局今両方の形で使われています。健康の森全体が広葉樹と針葉樹がほどよく混ざっていますが、林業家の方々からは、この山は林業ではない。手入れのしない怠け者の山だと言われます。しかしわたしは森林経営者であって、林業経営者ではないと言っています。なぜ手入れをして金儲けしないのかと何回も言われています。そのたびごとに自分の力の無さを感じますが、これ以上人工林をつくっても自分では管理が出来ないなと思いました。中央広場には、朝日森林文化賞頂いた時の記念碑を作っています。

「林業経営」ではなく「森林経営」

主な活動は、総会を4月29日、今は昭和の日になっていますが、以前はみどりの日に行っており、この日は、森に入って、自分達で山菜を採って、自分達で料理を作って食べます。100人位集まり、東京や北海道からも来てくれます。地元で食べていた料理を作って食べるという事で、非常にみなさん喜んでくれ、山水を使って作ります。会報は年2回発行しています。

今活動の中心は森の保育園です。最初は、人間が森に保育されて共に育つという観点から森の保育園という名前にしましたが、3年後に本当の保育園や幼稚園の子供が来て、結局森の保育園は、子供たちに全部奪われました。それまでは大人が60歳を過ぎたら森に行って森の仕事をしながら、森林リハビリをしてゆっくりと余生を送りながら大地に帰ろうという希望でしたが、逆に子供たちが入ってきて遊んでくれています。秋田市内から15ヶ所位の保育園、幼稚園から年間2500人から3000人が12ヶ月来てくれます。1月や2月の冬の雪のある時が一番面白いと来てくれます。つい数日も来て雨の日も風の日も泥んこになって遊んでいます。その時、子供達や先生達に言うのは、森の力というか、森林思想というものを頭で覚えさせるのではなく、子供達が遊びの中で覚えてくれたらいい、泥がついても虫に刺されてもこれが森なんだという、ちょっとした刺激を覚えてくれることによって子供たちは何か学んでくれるのではないのか。森の力、木の力、虫の力の影響を、3才、4才、5才の子供達に期待しています。最初に参加した子供が大学生になっています。あと5年位経つと何かまた良い事がおきてくるのか、その時は私が引退するのかという気持ちでいます。今年は市内だけではなく郡陪からも申し込みがあり、これから忙しくなりますが、子供

たちの力に逆に助けられています。

もうひとつ森を知っていただくために炭焼き体験というものがかかせません。火を使うということ、木を伐るといこと、いろいろな作業があります。人間の手で一つの木を炭に変えるという作業工程というものはまさに貴重なものであり、20年間続けています。炭焼き体験をするため東京からわざわざ来てくれます。山村で生きる、また森にひきつけられるなにかが生まれてくれればいいと思っています。

会を作った平成3年、私には非常に大きな転機がありました。それは9月に日本を縦断した台風19号で、風速60m、九州から東北にかけて80年、90年、100年の木が大被害を受けました。それまでは林業経営者でしたが、台風被害によりすべてがゼロより悪くなった時、はじめて森林の力を知り、森林経営者となりました。20年前に、日本で森林経営者という名前を出したのは初めての事だったと思います。そして人工林ではなく、森の力の中に人間が入って行き、そうして作られた森が自然災害に強いと初めて知り、それからは森から人を見ながら会を運営してきました。

会員の中でオカリナやギターを森の中で演奏してくれる人がいて、みんなに癒しを与えてくれます。子供や孫と来て山菜を採れば、家にはできるだけ持ち帰らないようにしてみんなで食べます。また、冬にスキーやソリを使わないで、自分の力で歩いてそして滑ってくる。私が驚いたのは、障害を持っている子供達が冬に来てくれて、その子供たちが一番長い距離を歩いたりして楽しんでい。障害を持っているので、転んだり四つん這いは当たり前であって、四つん這いになっても雪の中を歩いています。健常者は逆に立って歩こうとするから、ぬかって歩けない。人間は立つ事が良いのだとすると、障害者はちょっと困ると思いつながら、障害者は雪の上では四つん這いになって歩く事で健常者よりも早かった。そして、雪などに対し非常に感性が鋭く適応しながら遊んでいた。人間からではなく、自然が与えたものに反応が強いということは、大人が子供のためにいろいろやってあげる事が、これからはむしろどうなのだろうかという反省をさせられました。

私は、子どもより大人が森を散策する場合に心配が多いです。というのは、大人は自分だけを守り、自分の欲しいものほどこまでも採りに行き、持って行く。子供たちは、採らないで言えば止めますが、大人は珍しい物があれば、草花でも何でも持ち帰ります。だから、大人のイベントでは前と後ろに私達の仲間がついて歩いています。そうでないと途中からいなくなったりします。服装も大人は底の厚い登山用の靴で歩いたりします。それで草花の上を歩くと草花が死んでしまいます。マナー違反だと思いますが、薄い長靴が良いと説明しても、大人になると過保護になって自分を守るんですね。子供なら安い長靴で良いということそれでいいのですが。

また、こういうこともあります。子ども達がつくる海岸林活動で、子ども達と植樹活動をしました。下浜は海岸地帯で、真向かいには男鹿半島です。日本で一番ひどく松くい虫にやられた所です。そこを5年間かけて保育園や幼稚園の子供たちと一緒に松以外の木を植えました。不思議なのは、その中で威圧感がある人がいます。ヘルメットをかぶっている人です。子供たちはかぶっていないが、かぶっている人が1人いることで子供達も雰囲気もがらりと変わります。私が普段着で来て下さいと言っても、やはり森林組合の人など作業にはヘルメットを必ずかぶるのです。子供と一緒に

やる時は脱いで一緒に作業しても良いのではないかと思います。しかし安全基準があるでしょう。子供たちには、松くい虫が悪いのではなく、人間が松をきちんと管理をしなかったために虫が松を食べて、そのため私たちが木を植えられるというチャンスを作って下さったのだから丁寧にやりましょうと3才、4才の子供達400人ほど集まらうて5年間続けてやり通しました。

大人も子どもも「賑やかな森」で健康になる

10年くらい前までは森の中で総会もやっていたのですが、クマが出るということで、すべて森から食べ物などを引き上げました。なぜなら獣が食べ物の臭いなどに慣れる事によって、後で森に入った時に襲われる。人間が来れば何が貰えるという事はすべて作らないようにという事です。そして、人間が本物の森の中に入って楽しめるというような森にしよう。それが森の健康だろう。賑やかな森というものを目指しました。食べ物は森ではなく、私の自宅の前で3世代が一緒になって遊んだり、食べたりしている。そしていろいろな人が来てくれます。学校の先生の退職者が多い。という理由なのかな。校長先生をやっていた方などが来てくれる。3年くらい前からは学習塾の子供とその家族も来てくれる。息抜きに来る、こういう所のほうが頭に入るのか。森を自分たちのものにして下さっている感じです。雨が降った時にはグリーンシャワーロードという、緑の中を子供たちが歩く。飲み物を持ち、1歳2歳の子どもまで来てくれるので、獣が出てきたら大変だと思うが、自分の事は自分でやる。自己責任という事と、親も保育士さんも子供を絶対叱らない、規制語は使わないで、できるだけ子供たちの自由に遊ばせる。そういう形で森と友達になってもらいたいというのが私の森林思想です。また大人は森に入った時に医者から健康に関しての講義を聞き、森に入る前と帰って来た時の血圧の差を見ます。高いとか低いではなくバランスが良いか悪いかを見ます。それ以外にもいろいろありますが、まず簡単な事からやりました。

森をすべてスギ林や針葉樹にするのではなく、広葉樹とか、いろいろなものを混ぜて作ることにより明るさがあったり、色んな山菜が出たり、獣がいたりという賑やかな森というものを目指して、そのやり方として25年前に広葉樹の中に杉の本数を少なくして植える。普通は3000本のところ、私は2100本で、スギ一つの塊にスギを3本、1、2m位の正三角形に植えます。要するに環境順応造林という形でやってきて、今ようやく成果を見ながらやっています。岩手大学でもやっています。人間が植える物を少なくして自然の力を借りて、そこにある物産とのからみによって人間が植えた物と共生したいという願いを込めながら育てています。

新たな挑戦—老人の楽園「ジェロントピア構想」

将来について考えると、まず、秋田スギの価格は下がりました。これでは林業経営も森林経営もできません。でも、父親が植えた木は育ってきているので伐れますが、再造林はできる状態ではありません。いくら造林補助金をもらってもほとんど残らない。これが現在の秋田の状態です。林産の先生達や業者の方が来て、木は高い、家を建てた時もすぐ秋田スギは高かったと言われます。一番下の根元の1丁か2丁は化粧材なので3万円、4万円の値が付いても、上のほうが3千円か4

千円では収益が出ないです。いくらいろいろな人に言っても、元玉が高いから一本全部が高いと思っているのです。消費者はわからないのです。

森に対する国民の期待も、林産と木材生産は低下しました。私たちが林業・木材生産で、山村の活性化や林業の活性化を図ろうとしても、国民がこれだけ離れてしまっている。だから、これからは災害防止、温暖化、資源管理などに努めていかないとこれからの山村振興と森の生き方は難しいのではないかと思います。あまりにも人間が作ったものに偏りすぎて商売をして儲けようとした、ここにきてそのつけがきています。そこにこだわるよりも、一般の方々が注目しているものをいくらかでも取り入れないと山村は生きていけないのだらうなと思います。

今年、秋田森の会20周年を迎えるにあたり、新たな活動に挑戦しようと思っています。1つは、これまでやってきた森の保育園を中心に森と人との共生というテーマの下で、子どもが大人を連れてくる森とはどういうものなのかをもう一度考えなければならぬと思います。2つは、針広混交林を中心とする環境順応型森づくりにおける管理・生産コストの低減です。3つめに、高齢者の労働の場の提供という「ジェロントピア構想」の実現です。これは、平成3年に自民党に持って行った資料を検討しながら、お医者さんと一緒にやろうとしています。高齢者という言葉はあまり良くないのかもしれませんが、森の木は高齢になると価値が出て、人間は高齢になると価値がないというのは不思議ですが、高齢になったら木が喜ばれるように我々が喜ばれるような山村にしたいなということで、自分達の労働ができる、高齢者でもできるような作業提供の場、そして自分達の生活の場を考えなければならぬなと思います。老後も現役でいられるような林産物を育てながら自分の力で生きるという自給自足の精神を持ち、山菜も食べ、足りないものは他の物を食べながら、作りながら、後は年金しかないのだけれど、そのような生活をしながら山村でもう少し元気で生きたいと今20年目にして考えています。

ジェロントピア構想とは、医療に依存した健康からの脱却、要するに、死ぬ一歩手前まで自分の力で生きていくという事が基本だと医者と言います。いくら医者に行っても助かる事と助からない事があるので、自分で一生懸命生きようとする努力が健康に繋がる、その人の生き方になるのだらう。人間の心と体のバランスが良好な事が人間の健康ということなのです。経済的には自分達でできることは食べ物でも自分達でつくるといふ経済的な自立をし、これには年金も入りますが、精神的には森林思想というか、森林に対する敬愛の念を持ちながら、地元の里山を大事にしながら、若い方々に繋げるといふ仕事は私達にはあるのだらうと思います。山村にいくら資源が豊かでも、人がいなくなったらそれは豊かといえるのでしょうか。やはり、その山村を管理し、森を見て行く人がいて初めてそこに一つの集落ができると思います。必ずしも大人や子供、老人でなくても、いろんな人がいてくれれば、山村は生きていけると思います。必ず若い後継者だけがいなければならぬとは思っていません。山村は、いい道、いい風、いい光が一つずつ自然から頂けるように、私達は森の会を育てていきたいと思っています。

最後に、20年間秋田森の会をやってきたのは、何のためかと考えた時、それは、豊かな森を未来に伝えるためであり、木を植えることだとか法律的にどうのこうのではなく、森があって初めて私

達は生きていける。利益の追求だけをしていたような山村であってはぎくしゃくしてくるのではないのかという事を考えています。人間と森との信頼関係を子供のときからきちんと繋ぐことを今までやってこなかった。誰のための森づくりをやって来たのかと自己反省しながら、この問題に私たちは素直に取り組みながら、未来の子供たちが、良かったな、また遊びに行くよという森があることによって、また森が生きかえてくれる。衣食住がもたらされる森の姿というものを子供達にしっかり見て頂いて、そういう活動を私たちは続けていきたいと思っています。